

誌上ひとりワークショップ

(前編)

～家族援助は街のアパレル～

岡田 隆介

広島市子ども療育センター精神科

私は、聴衆の反応を取り入れたり織り込んだりしながら話すのが好きです。ワークショップも基本的に変わらないと思うのですが、こっちは大の苦手です。おそらく、参加者がディスカッションをしている時間帯に自分のリズムが途切れてしまうせいでしょう。

そんなわけで、今回、誌上で一人ワークショップを試してみようと思い立ちました。ケース提出も進行も講師も参加者も、すべてひとりでやります。ワークショップというよりはアンテナショップでしょうか。では、早速始めたいと思います。

1. 仕立て屋的家族援助

「はじめに、わたしが家族援助をどのように考えているかを説明しておきたいと思います。本日のワークはそれに基づいたものになりますので、ちょっと我慢して聞いてください。

解決に向けて効果的な手立てを考えるとという意味において、身体的な援助も心の援助も基本的に同じです。それまでの解決策では期待した成果が得られなかったわけで、援助は新たな解決策を考えるという方向にすすみます。

とはいえ、それまでの解決策はその人なりの問題の理解・仮説を根拠に組み立てられていますから、そう簡単に変えられるものではありません。さらにこの仮説は、そのひとりの人生観・信念によって支えられています。これは生きる枠組みそのものであって、各論に対する総論、家族の憲法みたいなものです。そんなものまで家族援助に含まれるのだろうかと考えると、とても気(荷)が重くなってしまう。さて、そんな家族援助とかけて街のアパレル・仕立て屋と説きます。そのころは、以下の通りです。

まず憲法、つまり生きる枠組みですが、これは援助対象の家族が肌身離さず付けていて、他人に見せびらかしたりしないものです。つまり、下着(アンダーウェア)です。仕立て屋は、下着にまで口を出しません。個人的なものですから。

その上に着るシャツ(ブラウス)、これが問題の理解・仮説です。仕立て屋からすると、全体を損なわせているのはこのシャツです。それこそが、仕立て屋が腕を振るう場所になります。ですが、家族はシャツの上にいろいろ着ていて、それらを脱いでもらわないとうまく仕立てられません。

一番上にまとっているのは、問題にまつわる不安のコートです。援助対象の家族は例外なくコートを着ています。コートの裏地は怒りですが、なかには裏表が反対の方もいます。表が怒りという派手目のコートです。以前は児童相談所でしかみることはなかったのですが、最近はけっこう流行しているようです。

大方の仕立て屋は、共感的に接しながらこのコートを脱がせます。ここでうっかり裏地を見逃すと、怒りに火がつくこともあります。怒りだけを扱うのは至難の業で、これはあくまで不安と一体にして受け止めるのがいいでしょう。

仕立て屋の腕に信頼を寄せると、家族はコートを脱ぎます。ここでジャケットの登場です。ジャケットは、問題を解決するために重ねてきた努力です。実際似合っていないにもかかわらず、ずっと同じものを着続けています。それは、先述のようにジャケット(解決努力)はシャツ(仮説)と一体だからです。

ジャケットを脱いでもらうには、この解決努力に敬意を表しねざらねばなりません。成果を得られなかったにせよ、家族が良かれと思ってやってきた努力なのですから。虐待だって、非行だって、不登校だって、素性は解決努力です。いっこうに楽にならなくても、他の策には目がいかず、問題が長引いたり大きくなったりしています。それを変えようと提案する以上、なにはともあれしっかりねざらしましょう。その上で代替案を用意します。

ジャケットを脱ぐと、やっとシャツが露わになります。ここで、家族なりの問題の理解・仮説が語られるのです。「そもそも」と振り返り「～が問題だ」と訴えるストーリーが深ければ深いほど、それを支える人生観も一緒に伝わってきます。ここが、大切なところですよ。

そして、シャツを見立てます。基本は、いま着用しているシャツを脱いでもらって新しいものをすすめるか、そのシャツを生かす方向でいくかです。ただ、これは仕立て屋が勝手に決めるものではありません。家族との間合いで、自然に決まっていくものです。

前者では、替わりの説明を用意します。“専門家”として「そうではなくて、問題は～だと考えられます。ですから、～をやってみませんか」と具体的に示すのです。家族の問題理解を置き換えるのですから、当然、場の緊張が高まります。

その際、替わりの説明が相手の腑に落ちなければまったく意味がありません。そのためには、それ以前にいていねいに不安・怒りを受け止め、しっかり解決努力をねざらっておかねばなりません。またセットである新・解決策が具体的で、実行可能と思ってもらえることも大切です。

提案されたのが魅力的なシャツなら、家族はためらうことなく自分のシャツを脱いでそれを身につけるでしょう。魅力的とは、①原因を考えないでいい(自分を責めない)、②予想していなかった新鮮さ(新しい視点)、③実行可能に思えるプランがある、ということです。つまり、実現可能な明日をデザインしたシャツ、ということになります。

後者は、家族の仮説を否定しません。だからといって、受け入れるわけでもありません。全体としては賛成できないけど、部分的に生かせるところはたくさんあるといったリフォーム的なスタンスです。

「いま、ここで」くりひろげられている仮説と解決努力をひっくるめて、比較的うまくいってるところを探します。結果がでていない解決努力にも、いつもの些細な「違い」を見つけます。無くても、創造的に探します。

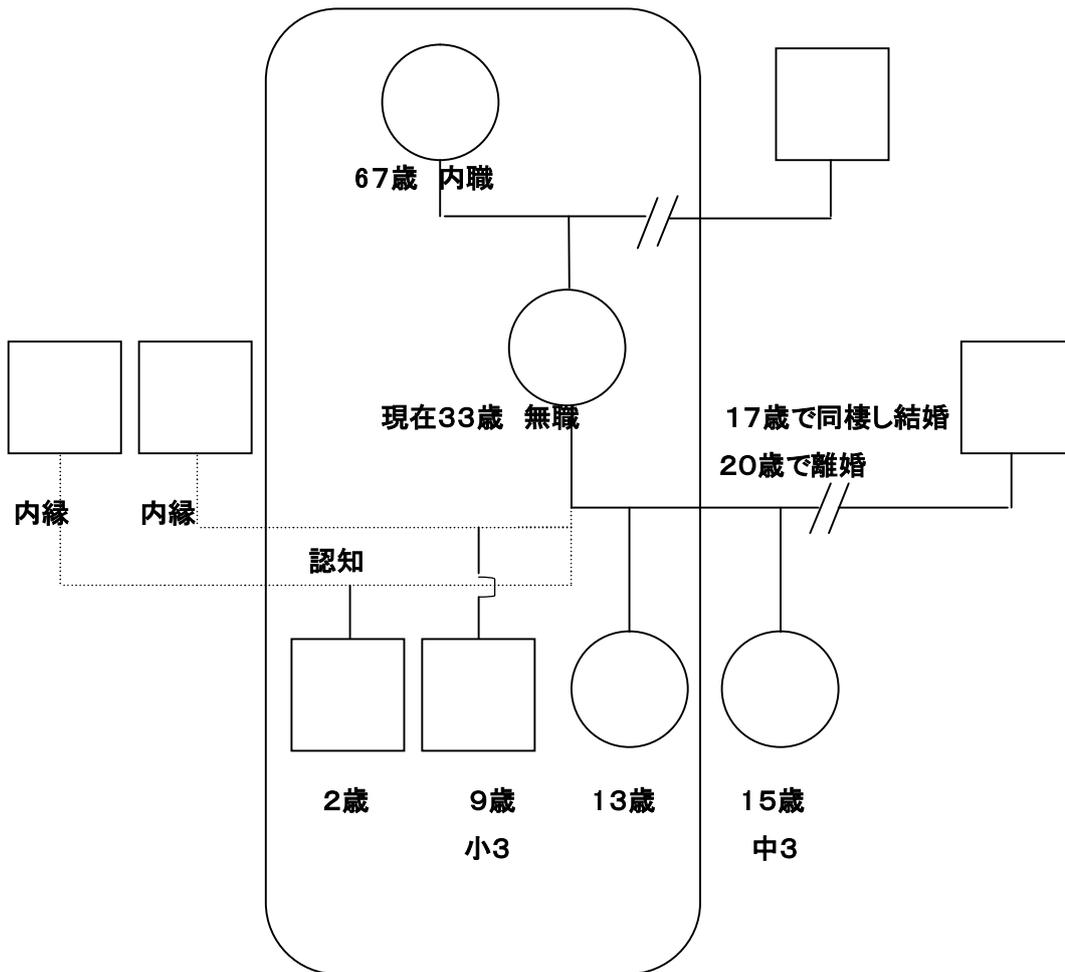
そして「このところは実によかった。是非、続けてほしい」とか、「どうやってそんなことを思いついたのか、教えてほしい」と解決志向的に接します。前者が明日を描いて見せる形だとすると、こちらは現在進行中のものに教わる形といえるかもしれません。

説明はこのくらいにして、いまから演習事例をもとに、不安・怒り・解決努力を探りながら家族の仮説にたどりつくプロセスと一緒に経験しましょう。

それでは4人ひと組になって自己紹介をし、書記と司会を選んでください。決まったら、班で家族図を見ながら、そこにある不自然さ、無理を話し合います。司会担当の方は発表者を選んでおいてください。書記の人は記録をお願いします」。

2. 家族を読む

演習事例の家族関係図(図1)



「では、演習事例のジェノグラムを見てください(図1)。ご覧のように、ごく限られた情報しかありません。そこから自由にこの家族をイメージしてみてください。どんな家族だろう、どんな問題を抱えていそうか、と想像します。わたしは、この手順を教えてくれた人たちの名前をとって、勝手に「団・早樫式」と呼んでおります。まとめるとこんな感じになります。

- ① 家族関係図をながめ、ここにある情報だけで、家族のライフスタイル(仕事・配偶者・住居等の選択の流儀、子どもの養育と生活維持の仕方、人との繋がり方等)を想像する。
- ② 不調和や無理の匂いがあるなら、どこか？
- ③ こうした作業を通して家族への興味が深まり、尋ねたいことや確かめたいことが明確になっていく。

誰でも行動するにあたり、いくつかの候補から選択しますね。ここに登場する母親だって、結婚や離婚の際に、あるいは子どもを誰が育てるかというときに、ある選択をしています。人生の節目における行動選択の仕方は、その人の人生観と密接につながっているはずです。そういった行動選択の流儀・くせも、ジェノグラムから見てくるでしょう。

(各班の家族イメージの報告を聞く)

「ずいぶんいろんな意見がでました。なかには、知ってるの？みたくないなのもありましたが、当たっているかどうかはまったく関係がありません。少ない情報だからこそ見えてくるものがある、情報に縛られないからこそ気がつくところ

ろがある、そういうことを実感してもらいたいわけです。

さらに、ここまでの作業で、この家族にいい意味での好奇心、関心が持てたと思います。誰かが提出した知らないケースから、もう自分の関わっている事例になった気がしませんか。ここは、このやり方のすごいところです。

そして、もっともっと聞いてみたいことが生まれたと思います。そういう“聞いてみたいこと”も大事にしてほしいと思います。

では、みなさんが報告してくださったものは、ホワイトボードにまとめました。こちらのパーポイントにまとめたのは、わたしの感じたことです。大部分はみなさんの意見とかぶっていますね。

- 1) 母は、男性との距離感(親密になり方, 別れ方, 別れた後の関係)や子どもとの距離感(細やかな愛情表現はしない、完全なる拒否もしない)が独特な人だろう。原型は、母と祖母との関係ではないか。
- 2) 男と知り合い、子どもをつくって別れ、引き取って祖母にゆだねるという一連の行動選択を支える家族システムがあると思う。
- 3) 15歳女兒が相談の対象で、暗黙の家族ルールに反発して家を飛び出したのだろうが、力関係だけでなく得体の知れない引力があつて苦しんでいるだろう。
- 4) 父の違う子どもたち同士、とりわけ同性間のかつとうは大きいだろう。
- 5) 男性からすると、明確な拒否も親密さもない三世代家族の結びつきが理解しがたいだろう。
- 6) 生活保護と母親のウラの稼ぎで支えられている母親優位の家族ではないか。
- 7) 不調和な家族構成のしわ寄せは、長女の異性交遊と家出徘徊、次女の弟たちや学校での乱暴行為として表れているだろう。

みなさんから、はやくケースの詳細を聴きたいという雰囲気伝わってきます。これも、この方式のすごいところだと思います。では、演習事例の詳細を説明します」。

3. こんな家族だった

「主役は、シンナーを28歳の男性Aの部屋で二人で吸引しているところを警察に補導された15歳中3の女兒です。Aとは結婚の約束をしているといいます。本児はやせていておとなしく、影が薄い感じ。頭痛や不眠を訴えるも幻覚・妄想は認めていません。食事は極めて小食。一時保護中の検査では、知的に軽度の障害がありました。

母は広島県で生まれ、小1のとき母方祖父母が離婚、祖母に引き取られました。母も、小学校時代から万引き・深夜徘徊で何度か児童相談所に一時保護されています。中学1年で家出し、臨県に住む祖父のところへ転がり込み、そちらの中学校に転校しました。高校在学中に、暴力団関係者を自称する本児の実父と知り合つて同棲し、高校は中退しました。18歳のとき、本児を妊娠して出産。妹を出産直後に実父と別れ、祖母を頼つて広島県に戻りました。祖父母からすれば、晴天の霹靂です。それ以降、本児の実父・祖父とは音信不通です。

翌年、母は二番目の男性と付き合いようになり、毎日足繁く通います。子育てはせず、本児や妹の世話は祖母がしました。本児は、この男性が父親だと思っていたようです。この男性はアルコールが入ると乱暴になりますが、本児に暴力をふるつたことはありません。

祖母は母とは言い争いをしても、孫たちにはやさしかったようです。やがて二番目の男性との間に男児が生まれるも認知してもらえず、男とは疎遠になりました。母は異父弟を引き取り、祖母に託しました。

このころから徐々に本児が不安定となり、小1半ばには、徘徊・ケンカ・盗み等を頻発するようになりました。母はあいかわらずふらふらと家を空け、学校との連絡はすべて祖母がしていました。当時、本児は『母親とはそういうもの』と思っていたようです。収入は祖母の内職と児童手当で、ギリギリの生活でした。

その後、母は出会い系サイトで知り合つた三番目の男性と交際を始めます。そして本児が小6のとき、その男性が

住む神奈川県に引っ越しました。本児としては卒業まで祖母宅にいたかったのですが、妹弟が行くというので従いました。母はその男性とは同居せず、近くに住んで生活保護を受けました。男性は訪問販売をして全国を転々とする生活で、不在がちでした。

本児は、この男性を極端に嫌いました。二人きりになることを極端に避け、母親が不在の夜には夜遅くまで徘徊しました。家出・リストカット・怠学等により、神奈川県の子童相談所に一時保護されこともあります。しかし、児童相談所ではほとんど胸の内を語っていません。このときは、母が男性と別れることを条件に家庭引き取りとなっています。

やがて第4子(男児)を産みましたが、男性が帰ってこないため広島に戻り、また祖母のもとに転がり込みました。神奈川県での2年近くは、実質、次女が異父弟たちのめんどうをみていました。

広島でも、子どもが多く体調もよくないと生活保護を受けました。あいかわらず母はふらふらと落ち着かず、子育ての中心は祖母でした。家の中はごみが散乱していて足の踏み場もない状態です。なお、母と三番目の男性との関係は現在も切れておらず、ときどきあっていました。あるとき、本児が男性と別れてほしいとんだところ、『そんなことを言うならあんたの面倒見ない』と言われ諦めたとのことでした。

本児は弟たちにきつくあたることはしませんが、面倒を見ることもほとんどありません。それに対し次女は、言葉遣いや行動が荒々しく異父弟たちにきつくあたりますが、面倒はよくみます。次女には補導歴はありません。本児と次女との関係は悪く、いつもいがみあっています。

広島でも夜間徘徊をしているところを補導され、一時保護されました。家庭引き取りとなったものの中学校に溶け込めず、不登校状態となりました。そのころ退学傾向のBと仲良くなり、Bの遊び仲間Aと知り合います。Aは無職で、過去に恐喝や詐欺で2度刑務所に入っています。

やがてAから告白されて受け入れ、Aの家に入り浸るようになります。学校は、A宅からときどき登校する状況でした。母はこのことに無関心で、学校もAのことは把握していませんでした。

やがてAは、母に対し本児と一緒に住みたいと申し入れます。母は『本児がそれを望み、Aが定職に就くならよい』と返答しました。しかしAは仕事をせず生活保護を受け、昼間からシンナーを吸引してフラフラするありさまでした。

本児と一緒に住むようになって、Aのシンナー依存の状況にショックを受けました。そして、自分が頑張るとめなければAは死んでしまうと考え、説得したりシンナーを隠したり必死を努力しました。しかし、Aは思いとどまるどころか一緒に吸いながらセックスをしようとつこく誘うばかりで、ついに好奇心に負けてしまいました。本児はシンナーを吸うことにためらいながらも、嫌われたくない、帰るところもない、という思いで同棲を続けていたようです。

あるとき、近所の住民からの通報でAの部屋に警察が踏み込みました。Aは現行犯で逮捕、本児は家庭裁判所送致となりました。この後初めて、本児は三番目の男性からレイプ被害を受けていたことを調査官に打ち明けました。

4. 家族を知る(不安と怒り)

「演習事例ではありますが、質問があればどうぞ」。

(質疑応答の後)

「ここからは、お手元にお配りしてある私版フォーマットに従って家族を知り、援助をすすめていきます。まずコートですね、家族の抱えている不安と怒りを知ります。それらが整理されて頭に入っていると、援助対象者のちょっとした心の動きとか言葉からそれを感じることができます。

次いでジャケットです。家族の解決努力をきちんとねぎらうためには欠かせません。そしてシャツです。家族の仮説を知ったうえで、自分たちの仮説を考えます。もしかしたら、アンダーウェアについてもちょこっと話し合うかも知れません。

ちょうどきりがいいし、皆さんお疲れのようですのでひと休みしましょうか。では、そうですね、ゆっくりコーヒーブレイクをしていただいて、3ヵ月後に続きをしたいと思います。やっとう岡田版というところで終了というのはいかにも怪しい感じがしますが、よろしければ今秋、また誌上でお会いしましょう。

(中編に続く)